みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

風水範疇の可変性について：客家囲龍屋をめぐる景観人類学的考察 (特集：民俗知としての風水)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5594

〈特集〉民俗知としての風水

風水範疇の可変性について

―客家囲龍屋をめぐる景観人類学的考察―

河合 洋尚 ◉国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員

本稿は、中国華南地方の客家民居として知られる囲龍屋（いりゅうおく）を対象とし、その風水実践の変遷を考察することを目的としている。客家は、囲龍屋の位置、形状、方位等を判断する際、祖先から伝えられてきたやり方を使うが、それを風水ではなく「看屋床（カンウッチョン）」（あるいは「做屋場（ズオウッチョン）」などの）という言葉で表してきた。しかし、一九九〇年代以降、学術やマス・メディアが囲龍屋を風水の観点から宣伝し始めると、彼らは、「看屋床」を風水の範疇から解釈し直し、その思想や実践の一部を変えるに至った。本稿は、風水を現地の主観から捉えることで、「看屋床」が風水として生まれ変わっていく過程を検討する。

1　客家と風水

風水は一般的に、古代中国に起源する、伝統的な環境知識であると考えられている。初めて体系的に風水の原理を説明した『葬書』、および後の風水書によると、風水は、地勢判断により「気」の流れを把握し、陰陽五行、八卦、二八宿などの宇宙哲学的な論理により、墓や住宅などの周囲環境を判断する、環境判断の技法であるとされる。[1] 風水はもともと王朝の環境測定術として発展したが、唐代末期、楊筠松（よういんしゅう）という風水師が戦乱を逃れて華南地方に移住した折、そこの民間で風水が伝えられた。それ以降、華南地方およびその周辺地域で風水が伝播し、明・清代には民間で広く流行するようになったのだといわれる。[2]

そうした民間の風水についての研究は、早くも一九世紀後半の宣教師の記述にまで遡ることができる。例えば、アイテルが香港の風水[3]を、デ・ホロートが福建省の風水[4]を記述したことはよく知られている。また、本稿の研究対象である客家の風水についても、宣教師であるルドルフ・レヒラーが、一八七八年という早い時期に、「客家と呼ばれる集団の間にはさまざまな民間信仰があるが、彼らが特に真摯に信仰しているのは風水である」という一文を紹介している。[5] 客家の風水をめぐる研究は二〇世紀に入っても続けられるが、なかでも客家と風水の関連性について学術的な影響を及ぼしたのは、客家学の祖として知られる羅香林の記述である。羅は、客家が唐代末期より五度の大移動を通して南下した北方（中原）漢族の末裔であると主張したが、この前提のもと、客家と風水の関

係について次のように述べた。

「客家は風水を甚だ深く信じる。風水は、漢族固有の遺産と言えるけれども、客家社会における風水の迷信ぶりは、他の各地と比べても顕著である。これは、客家の移住の歴史と大きく関係している。…（中略）…楊筠松が虔化（今の寧都）に移住した時代は、客家の第二期の大移動と完全に符合している」。[6]

この時点で、羅香林は、①風水が客家の間で深く信じられていること、②その背景には客家の移住の歴史が関連していること、③楊筠松の移住の時期が客家の中原からの大移動と重複していること、を挙げている。ただし、羅香林は、だから客家が中原文化である風水を深く信じるのは当然であり、楊筠松が客家であると、明確に述べていたわけではない。しかし、これらの見解は、後世の客家研究者により、客家風水論の基軸として議論されるようになった。[7]

なかでも、上述の羅香林の説を継承し、今日に至る客家風水論を中国で打ち出したのは、贛南師範大学客家研究センター所長の羅勇であろう。羅勇は、客家地域で風水が流行している理由について、主に次の三点を挙げた。すなわち、①楊筠松は唐末の戦乱を逃れて中原から華南に南下した「客家先民」（客家の祖先）であること、②楊筠松は今日の客家地域である贛南（江西省贛州市）に逃れて形勢（江西）学派を創始し、それを民間の客家に伝えたこと、③理気（福建）学派の創始者である王仮（おうきゅう）もまた贛南出身の客家であったこと、④したがって中原の文化である風水が客家地区において脈々と継承されてきたこと、が羅勇によって強調されたのである。[8]

周知の通り、今日の中国では風水は公的に「迷信」であるとされており、特定の民族やエスニシティの風水を殊更強調する研究は稀である。

図1：中原と華南地方の客家居住地

例えば、筆者は、ある著名な潮州研究者にインタヴューをおこなった際、「潮州地域の風水はむしろ客家地域よりも盛んであると言えるが、我々はまだ政治的な正統性を見つけていないので、風水はあまり書けない」と述べていた。実際、中国客家学の中心の一つである嘉応大学客家研究所が刊行する『客家研究輯刊』にはたびたび風水をテーマとする論文が掲載されているのに対し、中国潮州学の中心の一つである韓山師範大学が刊行する『潮学研究』には、風水関連の論文がほとんどみあたらない。では、なぜ客家の風水が現代中国において注目されているのかというと、客家にとって風水が中原文化の精髄であり、それが客家というエスニシティの精神的支柱であることが羅勇らによって示されたからである。

客家のエスニシティ精神を体現する要素としての風水は、これまで数多くの研究者によって探求されてきたが、そのなかで特に注目を集めてきたのが、囲屋、円形土楼、囲龍屋といった客家の集合住宅における風水の存在である。特に中国の客家学者たちは、これらの集合住宅に陰陽五行、八卦、天人合一など中原文化の要素が内在することを指摘することで、客家が中原民族の末裔であることを論証しようとしてきた。他方で、こうした記述は、政府の公式ホームページや観光パンフレットといったメディア媒体を通じて、客家住宅をめぐる集合的なイメージをつくりだしてきたのである。では、客家住宅がいかように描かれてきたのかについて、囲龍屋を事例として述べていくことにしたい。

2. 囲龍屋と客家風水

囲龍屋（写真1）は、北京の合院式、陝西省のヤオトン（窰洞）式、広西チワン族自治省のガンラン（杆欄）式、雲南省の一顆印と並ぶ、中国五大民居の一つである。囲龍屋は、その絶対的多数が広東省の東部に位置する梅州市（旧称：梅県、嘉応州）の管轄内に分布しており、その他、広東省河源市、潮州市、福建省龍岩市にもわずかに分布しているが、これらの地区はいずれも梅州市と隣接している（図1を参照）。梅州市は、住民のほぼ一〇〇パーセントが客家で占められ、世界に居住する客家の「故郷」であると目される地区である。

図2を見れば分かるように、囲龍屋の内部には複数の部屋があり、全体的に楕円状になっている。中堂間（ゾントンギャン）、横屋間（ワンウーギャン）、囲龍間（ウィロンギャン）には、伝統的には同じ宗族の者が居住する。囲龍屋は、規模が大きければ三〇〇余名、規模が小さくても数十名の者が住める構造になっている。

写真1　囲龍屋の全体写真

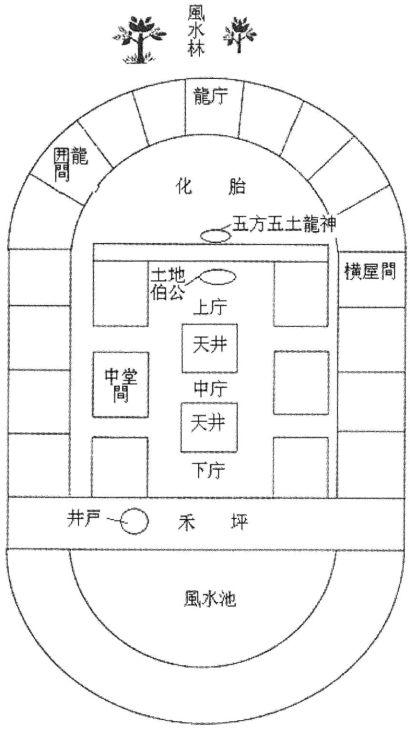


図2　囲龍屋の平面図

囲龍屋の中央部にある上庁（ソンタン）、中庁（ゾンタン）、下庁（ハータン）は、居住者たちの公共の場である。上庁には、祖先に位牌が設置してあり、ゆえに別名を祖堂という。また、上庁と中庁、中庁と下庁の間には天井（上方に屋根がなく下方に長方形の浅い堀がある）があり、採光と水はけに優れた箇所となっている。さらに、ほとんどの囲龍屋の前には半月型の池があり、防火などに利用され

る。この池は、風水上重要であるという理由から、風水池とも呼ばれる。他方、囲龍屋の後方には、半月型に隆起する化胎（ファートイ）と呼ばれる部分がある。化胎は通常、コンクリートではなく、鵞卵石（オーロンサッ）という楕円形の石が敷き詰められており、それゆえ化胎は亀の甲羅の形に見える。また、化胎児の前側面には、五つの異なった形の図案が刻まれている。これを五方五土龍神（シーフォンシートウロンサン）という。さらに、化胎の周りには、囲龍間が取り囲んでいる。囲龍間は、囲龍屋の規模が大きければ、二重にも三重にもなる。ただし、そのうち一列目の真ん中の部屋だけが神聖視されており、人が住むことが許されていない。この部屋は龍庁（ロンタン）と呼ばれる。[9]

さて、それでは上述の学術研究は、囲龍屋の風水をいかに描き出してきたのだろうか。その論点を筆者なりにまとめると、少なくとも以下の四つの方向性で議論が展開されている。[10]

第一は、客家の風水は形勢学派が主流であるという立場から、「龍」や「水」などの原則に基づいて囲龍屋の風水を解釈するものである。数名の中国客家学者は、客家は、囲龍屋の風水を看るにあたり、まず山の形状（すなわち「龍」）を看て、そこに「気」が通っているかどうかを判断するという。そして、山から降りてくる「気」は、まず龍庁を通り、続いて化胎、五龍五土龍神、祖堂、天井を通ってから、最終的には池（すなわち「水」）に辿り着くと主張する。これらの論で主張されているのは、囲龍屋で神聖視されている龍庁、化胎、五方五土龍神、祖堂、池は、みな囲龍屋の中軸線上にあるということである。ここから、中国客家学者は、囲龍屋の風水には、古代中原の文化的記号である「伝統中軸線」が表れていると論じる。また、化胎の二文字もまた古代中原において編まれた『黄帝内経』に由来するというので、同様に中原文化の表れであると捉えられている。

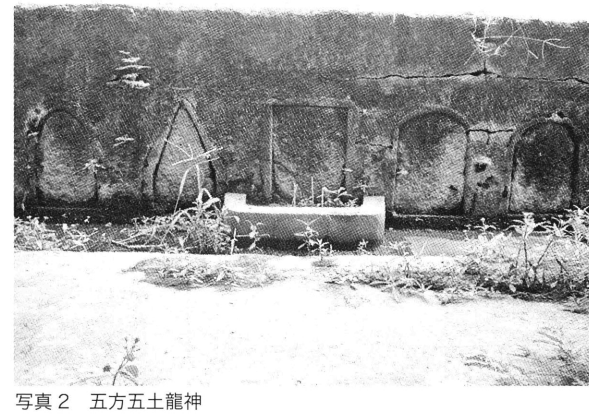


写真２　五方五土龍神

第二は、囲龍屋の風水には、古代中原の文化的記号である「陰陽五行説」が内容されているという説である。この主張は大きく二つに分かれる。一つは、囲龍屋の後方に位置する化胎と前方に位置する池とが、「陰陽」の原理によって成り立っているという論である。すでに述べたように、化胎と池は、ともに半月の形をしており、両者が組み合わされば円形となる。また、化胎は陰城（イムサン）と呼ばれることがあることから、化胎を「陰」、池を「陽」とみなしてきた。もう一つは、五方五土龍神に刻まれた五つの図案が、五行の形をしているという論である。写真２にみるように、五方五土龍神の図案は、それぞれ異なった五つの形をしている。中国客家学者は、図案の形状から判断して、それぞれは左から右に向かって木→火→土→水→金の順に並べているのだと説いている。

第三は、客家は風水をとりわけ篤く信仰するので、彼らには自然との調和を好む「天人合一」の思想が備わっていると論じるものである。囲龍屋では、その周囲に風水林や池など人工的な自然が配置されることがある。こうした側面から、客家の精神のなかに「自然」と「文化」の協調関係を愛する古代中原の思想が組み込まれているという論は、中国

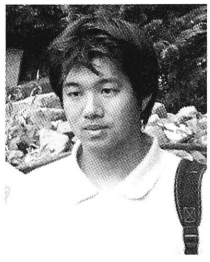
客家学においては繰り返し主張されてきている。

第四は、風水の技術に関するもので、客家集合住宅の方位や尺度を測る技法のなかに、古代中原文化が表れているとする議論である。まず方位に関しては、客家は囲龍屋の建設にあたって羅盤を使い、囲龍屋の中軸線を南北子午線に合わせるのを好むという。次に、尺度の測定では、魯班尺という吉凶の刻まれた物差しを使うとされている。魯班は、古代中原の伝説の大工と考えられている人物である。

このように、中国客家学は、形勢学派、羅盤、魯班尺といった風水の理論や道具からだけではなく、中原文化の結集点という視点からも囲龍屋を捉えている。そして、こうした囲龍屋の風水をめぐるイメージは、単なる学術的な描写にとどまらず、マス・メディア、博物館展示、学校教育などを通して流布されるようになっているのである。[11]

現在、梅州市に行って囲龍屋の風水について聞くと、現地の人々は、形勢学派、伝統中軸線、陰陽五行などの観点から彼らの伝統住宅を語るであろうし、それを中原から南下した客家の文化的「遺産」であると説明するかもしれない。また、彼らが羅盤や魯班尺を使って囲龍屋の風水をみる姿を目撃するかもしれない。その意味で、中国客家学が主張してきた囲龍屋の風水イメージは、全く根拠のないソースから捏造された紛い物であるとは言えない。だが、もし中原文化という視点からのみ囲龍屋の「風水」を捉えると、おそらく客家がより重視してきた囲龍屋への思想や実践を見落としてしまうであろう。彼らは、囲龍屋の建設にあたって、しばしば祖先から伝えられてきた慣習的なやり方を使ってきた。また、彼らは、それを風水ではなく「看屋床」と呼び、囲龍屋を建造する際の基本的な原理としてきた。

では、梅州市の客家が重視してきた「看屋床」とはどのようなものであるのかについて、次にX宗族の事例を見ていくことにしたい。



かわい・ひろなお◎一九七七年神奈川県生まれ。二〇〇九年東京都立大学社会科学研究より博士学位を取得。中国・嘉応大学客家研究所講師、中国・中山大学社会学与人類学学院助理研究員［講師］を経て、現職。専攻は、社会人類学、景観人類学、中国漢族研究。Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cultural Landscape in Urban Guangzhou（『Asia Pacific World』3-1, New York and Oxford: Berghahn Books, 2012）ほか論文三〇点余。

3　囲龍屋と「看屋床」

筆者は、梅州市で調査を始めたばかりの頃、[12]上述の風水イメージを入れ、いくつかの宗族を訪問した。しかし、そこで聞く「風水」の話は、中国客家学が説明してきたモデルとは、異なることが多かった。もちろん、化胎を流れる「気」について説明したり、五方五土龍神を五行の視点から説明したりする人々もいたが、それ以上に、祖先から伝えられてきた別のやり方を強調することが多かった。このやり方は、必ずしも固定した名称が与えられていたわけではなかったが、しばしば「看屋床」と呼ばれていたので、本稿ではこの用語を採用する。

ここで注意しておきたいのは、「看屋床」は祖先から伝えられてきた囲龍屋の建造方法であるがゆえに、そのやり方は各宗族によって差が認められるということである。つまり、全ての客家に共通した「看屋床」は存在しないのである。だから、「看屋床」とはどのようなものであるかを説明する際には、特定の宗族の事例から出発せざるを得ない。梅州市の都市部（梅江区）に居住するX宗族の場合、彼らが説明する「看屋床」は次のようなものであった。